

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子



学位申請者 張麗（チョウ レイ）

論文名 現代日本語の可能表現に関する研究—一段動詞及びカ変動詞「来る」を中心—

【審査結果】

現代日本語における可能表現に用いられる動詞形式として、動詞が一段動詞および「来る」である場合、規範的とされるラレル形（「見られる、来られる」）だけでなくいわゆるラ抜き形（「見れる、来れる」）も広く用いられる。この問題についてはこれまでも種々の研究がなされているが、ラ抜き形の意味や構文面の特徴についての実証的な研究はなされていない。本論文は、先行研究の諸論点を検証するとともに、両形式の使用実態の綿密な調査にもとづいてラ抜き形の意味及び構文面の特徴を明らかにし、両形式の異同の実態を正確に捉えることに成功している。統計処理においてやや不十分な点もあるが、全体として独創的で学術的価値の高い研究となっている。最終試験においては、質疑応答を通してこの問題に対する張氏の深い理解が確かめられ、今後の研究を着実に発展させうる力量がうかがえた。

以上、論文審査と最終試験の結果にもとづき、審査委員会は全員一致で、張麗氏に博士（学術）の学位を授与するのが適切であると判断した。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査とし、本学の川村大教授（主任指導教員）、鈴木智美教授、佐野洋教授、および学外の田中ゆかり教授（日本大学・日本語学）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

本論文は次のような構成となっている。

序論

第1章 現代日本語のラ抜き形についての先行研究

第2章 問題提起及び本論文の立場

第3章 先行研究における論点の検証

第4章 意味の違いと可能形式の使い分け

第5章 評価的表現との関係

第6章 個別用法

第7章 結論

参考文献

序論で本研究の目的、研究方法、論文の構成等が述べられたあと、第1章「現代日本語のラ抜き形についての先行研究」では、ラ抜き形の発生時期、発生地域、生成の歴史等を整理したうえで、先行研究を論点別に整理して問題点を指摘し、現在もとめられる調査研究として9点があげられる（実例に基づく調査、今世紀におけるデータに基づいた研究、話し言葉に近いデータに基づいた調査、様々な会話の場面におけるデータに基づいた研究、方言の影響を排除した研究、定量的調査、網羅的な調査項目を備えた研究、可能・意図成就の意味の違いに注目した研究、評価的表現との共起関係の有無に注目した研究、ラレル形との対照研究）。

第2章「問題提起及び本論文の立場」では、第一章で挙げられた研究上の要請に応えるべく本論文では次のような研究を行うとされる。すなわち、調査資料として、話し言葉に近い文体の書き言葉データである3種の資料、すなわち、インターネット上のクチコミデータ、「Yahoo!知恵袋」(BCCWJ2009 モニター版)、漫画作品から収集した実例データ、を用いること、そして検証項目として、まず先行研究の検証として①言語外的特徴（年齢、性別、話し手と聞き手の年齢や社会的関係の差等）、②動詞の種類（語幹長、活用の種類等）、③主節中の使用か従属節の使用か、④形態的特徴（肯定形か否定形か）を確認するとともに、本研究における新たな観点として⑤可能の意味（可能か意図成就か）、⑥構文中の位置（文中、文末等）、⑦評価的表現と共起するか否か、について考察するという。

第3章「先行研究における論点の検証」では、第2章であげた①～④の点について、3種の調査資料が網羅的に調査され、次のことが明らかにされる。すなわち、①言語外的特徴としては、(a)10代～30代の方はラ抜き形とラレル形の使用傾向がほぼ同様だが、40代以上では徐々にラ抜き形の資料率が下がっていく、(b)性別による有意差はない、(c)ラ抜き形は異世代間よりも同世代間で多く用いられるが、異世代間でも親しい間柄あるいは敵対関係ならばならばラ抜き形が用いられる、②動詞の種類としては、ラ抜き形は語幹が1～2音節の動詞だけでなく3～4節の動詞でも用いられる、下一段動詞より上一段動詞にラ抜き形の使用が多い、③ラ抜き形は否定形より肯定形で現れやすい、④ラレル形よりもラ抜き形のほうが従属節において用いられる、といった点である。これらの調査によって、先行研究で述べられてきた特徴が、現代語の話し言葉に近い大量のデータにおいて統計的に確認された。

第4章「意味の違いと可能形式の使い分け」では、ラレル形とラ抜き形の使用に可能の意味がどうかかわっているかが独自の観点から調査される。可能形式の表す意味について多くの研究では「能力可能」と「状況可能」の2類に分けられる。そしてこの2類とラレル形・ラ抜き形の使用とは関係がなさそうだというのがほぼ通説である。それに対して本論文では、尾上(1998)、川村(2013)に従い、可能形式の意味を《(狭義)可能》(“動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する”)と《意図成就》(“一回的な行為が意図したとおりに実現する”)に分ける立場にたち、この2類とラレル形とラ抜き形の使用実態との関係を調査する。その結果、ラ抜き形のほうがラレル形よりも《意図成就》用法で用いられやすいという傾向が、統計的有

意差のあるものとして明らかにされる。

第5章「評価的表現との関係」では、「見れて{よかった／うれしかった／重宝です}」「見られなくて{残念だった／悔しかった／不便でした}」における{ }内の表現を「評価的表現」とよび、可能形式が文中のどの位置に現れるか、2つの形式による使用差があるのかが調べられる。そして、ラレル形もラ抜き形も評価的表現を伴うのは文中用法に集中すること、また、ラレル形よりもラ抜き形のほうが評価的成分を伴いやすいこと、ラ抜き形は「Vてよかった」という環境に、ラレル形は「Vなくて残念だった」という環境に現れやすいことが統計的有意差をもって確かめられている。

第6章「個別用法」では、可能形式が文中・文末に用いられる種々の用法（テ用法、ノデ用法、中止用法、ノダ用法、等）のうち、用例数の多かったものについて、ラレル形とラ抜き形のどちらが多く用いられるかが、3種類のデータについてあらためて詳細に観察される。その結果、いずれのデータにおいても、ラ抜き形が「テ用法（接続助詞テを下接する用法）」テ用法で意図成就を表し、かつ評価的表現を伴う用法の出現率が有意に高いという結果が得られている。

第7章「結論」においては、本論文で明らかになったことがまとめられ、本研究の学史的な位置づけがなされる。

【最終試験（公開審査）の概要】

最終試験（公開審査）は2017年8月24日（木）15:00～17:00に、東京外国語大学本部管理棟2階中会議室において行われた。はじめに張麗氏より、博士論文の内容について説明がなされ、その後、各審査委員より評価が述べられるとともに質問がなされ、それに対して張氏より考えが述べられた。

本論文の内容について各審査委員から様々な面から評価がなされた。高く評価できる点は次のような点である。

- (1) 現代語の2つの可能表現形式（ラ抜き形とラレル形）の使用実態について、事例調査にもとづいて論じたもつとも網羅的な研究である。
- (2) 先行研究を渉猟し、その調査上の問題点を整理した上で、それらを克服することを目指し、調査資料（口頭語に比較的近い文字資料を複数ジャンルにわたって調査する）や調査方法（事例を統計的に調査する）に工夫を凝らしている。とくに口コミデータを調査したことは、本論文の主張にとって有意義であった。
- (3) 可能表現形式の表す意味とラ抜き形・ラレル形の使用分布との関係を探るにあたって可能の意味の2大別である《可能》と《意図成就》に初めて注目し、この2つの意味とラ抜き形・ラレル形の使い分けとの関係の有無を調査し、一定の有意な結果を得た。
- (4) 可能表現形式の使われる構文的条件として、「評価的表現」を伴う用法が頻出することに初めて注目しそれを数量的に確認した。また、それぞれの使用環境がラ抜き形とラレル形によって有意に異なることも確認された。
- (5) 先行研究で取り上げられた観点についても3種類の資料について網羅的に再調査し、

先行研究で一定の結論が得られていたものについてはそれを実証的に確認し、結論が割られていた論点については、どちらが支持できるかを数量的な観点から明示している。また、先行研究（20世紀末）から現在までの時間経過に伴う変化の実態をある程度捕捉することに成功している。

以上の諸点が高く評価された一方で、各委員からいくつかの疑問点や再考すべき点が指摘された。次のようなものである。

- (1) 一つ一つの結論が統計的に有意であることは否定できないが、2つの要素の連関を指摘するに留まり、なぜそのような連関があるかについては考察・説明しようとしていない。仮説的であってもなにか自身の考えが述べられてもよかったのではないか。
- (2) 得られた種々の結果が統計的に有意であることは否定できないが、わずかな差であるものも多い。そのような統計的なわずかな差にどれだけ意味を見出して2形式の使い分けの説明原理としうるのか、いくらか疑問を感じさせるところがある。
- (3) 本論文にとって重要な概念である尾上（1998）等の《可能》《意図成就》、「評価的成分」について必ずしもわかりやすい説明がなされておらず、これらについての張氏の理解にやや不安を抱かせた。
- (4) 統計ソフトの操作に習熟しておらず、また出力表示の意味を理解していないと思われる点が若干みられる。

このような問題点は、張氏が、可能表現2形式の異同の解明にあたって、先行する膨大な諸研究を理解し、そのなかから自身の研究の課題を見出し、独自の研究として実証研究に徹しようと格闘したことによるものと思われ、努力がうかがえる。本論文において不十分な点が残っているとしても、今後それについて十分に発展させていくべき土台を作った論考として、本論文の価値は張氏にとっても大きいと思われる。審査委員からの種々のコメントも、張志の研究の今後の進展を期待しその方向を示そうとするものであった。

【総合的な判断】

本論文は、研究の対象についても方法についてもすぐれた論考であり、日本語の可能表現形式の研究に寄与するところの大きい着実な論考である。最終試験においては、論文の上のような不備について審査委員から指摘しそれに対する張氏の考えをたずねたが、その応答から、張氏が本論文の成果を不備も含めて冷静に自覚しており、不備については補うべき方向を見出しつつあることがうかがえ、張氏には、本研究をもとにさらに研究を発展させていける研究者としての資質が備わっていることが確認された。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は本学の「総合国際学研究科博士学位論文評価基準」を十分に満たしていると判断された。よって審査委員会は全員一致で、学位申請者 張麗氏に博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論に達した。